

書評

「小池・小泉『脱原発』のウソ」

金子熊夫ほか：飛鳥新社

先日の衆議院選でもエネルギー問題は殆ど議論されず、希望の党も脱原発を掲げた。原子力推進は、自民党と幸福実現党だけだったがこれには疑問を感じている。野党の政治家たちは脱原発を唱えるが、原発ゼロで日本の将来は大丈夫と考えているのだろうか？

小泉元首相は、最近では脱原子力を唱え、小池都知事にも脱原発政策への協力を呼びかけたようだ。氏が脱原子力を主張する理由は、高レベル廃棄物の処分問題について日本には適地がないことなどを問題視している。原子力に代わるエネルギー源については「具体的な案は誰か頭の良い人が考えてくれるだろう」というだけで無責任ではなからうか。

本書は、原子力問題に詳しい金子熊夫氏、小野章昌氏、河田東海夫氏の三人が、小泉氏が唱える脱原子力の主張は間違っているということなどを根拠を示しながら説明した原子力推進の著作である。

金子熊夫氏は外務省出身で初代原子力課長として日米原子力協定交渉に携わり、その後外交面を通じて原子力を見て来た。小野章昌氏は三井物産で原子燃料ビジネスに取り組み、資源問題に詳しい。河田東海夫氏は旧動燃事業団に入社、核燃料サイクル分野に深く関わり、高レベル廃棄物の処分などについても造詣が深い。

これら三人の専門家たちが、日本が脱原発を進めた場合の問題点（喜ぶ国はどこか）、再生可能エネルギーは利用を進めても限界があるため原子力の代わりにはならないことなどを理系の話が苦手の人にもわかり易く説明している。この本で金子氏が提案している「高レベル放射性廃棄物の処分場は原子力発電所の敷地から海に斜めの坑道を掘り、海面下数百メートルの安定した地層の中に作ってはどうか」というアイデアは用地確保が容易で、漁業にも支障がないなど優れた点があり、高レベル廃棄物の処分場問題を考えるうえで参考になる意見ではないかと考えさせられた。

この本は真っ先に小泉元首相や小池都知事に献本されていることと思うが、どのような反応があったのか知りたいところである。

(シニアネットワーク会員 齋藤 隆)